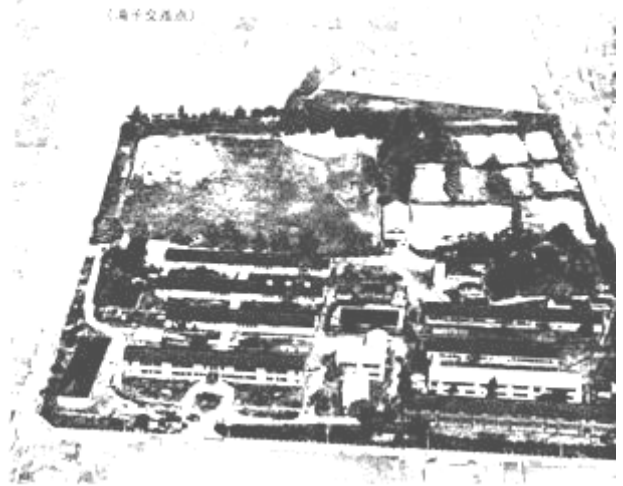


キャンパスと「八高古墳」

この写真は『名古屋市立大学 50 年の歩み』に載っている昭和 38 年頃のものだ。あまり鮮明でない写真をコピーして、それをスキャナで取り込んだため見えにくい。滝子交差点が左上にあり、現在の山の畑キャンパスの輪郭をおおまかに見ることができる。テニスコートのあたりから、人社棟まで建物が並んでいる。図書館や自然センターのあたりは、空き地(グラウンド)のようになっている。黒く写っているのが、古墳のようだ。当時の校舎やキャンパス風景をもっと知りたいものだ。



角田美弘『八高追憶 旧制高校生活回想』にも、八高時代の校舎などの写真がい

くつか掲載されている。この本の表紙は、博物館明治村に移設された明治期の代表的な洋式門である八高正門の写真だ。その説明板によると、戦後の学制改革で名大教養部の正門となり、昭和 40 年に校舎が市大(名古屋市)に移管され、45 年 3 月から明治村正門になった。

右の写真は、生協の北にある古墳に朝早くのぼって撮ったものだ。昨秋にも「秋のキャンパスと古墳」というレポートを書いたが、もう一度、古墳の写真を撮ってみたいとなった。「第八高等学校所在之地」という記念碑、80 周年記念の石碑、それに「わが友、若き若人よ」という青春像である。

学生はあまり古墳を意識していない感じだ。コンパクトなキャンパスに緑と潤い、アメニティを与えてくれている古墳をもっと大切にしていきたいものだ。魅力あるキャンパスづくりのために。それと八高時代からのキャンパスの歴史、大学と地域とのかかわりについても関心を高めていきたいものだ。



(7月10日 記)